

NEWSLETTER No.30

2020. 6. 4

I センター長就任のご挨拶
(川喜田敦子)

II 2020年度DESK活動計画

III 欧州研究プログラム

▼2020年度新規登録生一覧

IV 日独共同大学院プログラム

▼2020年度新規登録生の研究計画

(石井萌加・瑞秀昭葉・峯沙智也・相馬尚之)

V PAJAKOギーセン大学ワークショップ
▼参加記 (濱崎千波)

VI 2019年度奨学助成金

▼ZDS-BA (中野瑛美)

▼ZSP (飯泉佑介)

VII 関連出版物の紹介

▼『ヨーロッパ研究』第19号

I センター長就任のご挨拶

ドイツ・ヨーロッパ研究センター長
東京大学大学院総合文化研究科准教授

川喜田敦子

このたび、2020年4月に東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター (DESK) のセンター長に就任いたしました。私は、以前、DAAD寄付講座ドイツ・ヨーロッパ研究室 (2000年に駒場キャンパスに設立) が現在のドイツ・ヨーロッパ研究センターに改組された時期にセンターの運営に関わっておりました。2004年4月から2010年3月にかけての時期にあたりません。当時は、DAAD寄付金が継続されるかどうかが決まる初めての外部評価を無事に終えて、現在にいたるまでDESKの教育プログラムの中核をなしてい

る欧州研究プログラム (ESP)、日独共同大学院プログラム (IGK) が始まった時期でした。今、それから10年が経ち、すっかり安定したDESKに再び戻ってきたこととなります。

改めて振り返ってみると、当時、新しく設立されたESPやIGKに参加していた学生たちは、この間に、大学の教員・研究員としての道を切り拓き、また社会の様々なセクターで活躍の場を見つけています。巣立っていった学生たちの活躍こそが、DESKの活動の証であり、同時に、活動を支える原動力にもなってきたのだと強く感じます。

今年も4月のガイダンスを経て、DESKは、ESPに5名、IGKに4名のプログラム登録生を迎えました。新型コロナウイルスの全世界的な感染拡大のなかで、国際的な移動の可能性を大きく制限された大学院生たちが、研究対象地域であるドイツとの関係をどの

ように維持し、学位取得までの道筋をどう描くかを考える手伝いをするうえで、DESKの役割はいつも増して重要になっていると考えております。

厳しい状況に置かれているという意味では学部生も同じです。DESKは、トライリンガル・プログラム（TLP）参加者のために、毎年、夏と春にドイツ研修旅行を企画してまいりました。初修外国語として初めてドイツ語に触れた前期課程の学生が、その言語が実際に使われている地域を訪れて、現地で実際に言葉を使いながら学ぶための貴重な機会だったのですが、それも今の状況では難しくなっております。DESKとしては、これをどう補うのかを考えていく必要があります。

半年前にはおよそ予測もしていなかった規模と速度で感染が広がり、外国語学習・外国研究を行うすべての学部生・大学院生の学修が深刻な制約の下に置かれております。他方で、各国の大学・研究機関における全面的なオンライン・コミュニケーション

の導入により、これまでとは異なる国際交流・協力の可能性が大きく開けてきていることも実感しております。4月以降、DESKには、オンラインでできる、もしくはオンラインだからこそ可能になる様々な交流のオファーが国内外から届いております。外国の大学のオンライン授業への参加、海外の大学生とのオンラインでの交流企画、オンラインによる講演会や共同コロキウムなどがその例です。世界各国のドイツ研究者をつなぐオンライン・インタビューシリーズも複数の大学・研究機関で企画されており、私自身も先日インタビューを受けてまいりました。学生たちが学修・研究を進める上で極めて厳しい状況にあることはまぎれもない事実ですが、それでもなお学生のためにできることを、世界中の頼りになるパートナー大学・研究機関と協力して探しながら、この難局を切り抜けていければと考えております。

2020年度DESK活動計画

新型コロナウイルス感染症の下での支援の継続

今般の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大を受けて渡航制限が続く中、研究者の招聘や国際会議への参加、DESK奨学助成金による学生の現地調査の支援、といったDESKの活動も大きな影響を受けています。2020年3月以降、TLPケルン・ウィンタースクールプログラムへの学生派遣の中止、ドイツ・グライフスヴァルト大学歴史学研究所のクリューガー教授（Prof. Dr. Christine G. Krüger）、およびボン大学歴史学研究所のロアシュナイダー教授（Prof. Dr. Michael Rohrschneider）の招聘の中止など、多くのイベントを中止せざるを得ない状況

がありました。他センターとの協力関係の中で進められてきた企画のなかでも、例えばバーミンガム大学主催の国際会議は中止が決定し、西オーストラリア大学との共同セミナーについても来年度への延期が見込まれています。さらには、TLPボンサマースクールへの学生派遣や、これまで13年間にわたり継続されてきたオッツェンハウゼン欧州アカデミーでのヨーロッパ研修セミナーについても、中止もしくは代替プログラムへの切り替えの可能性が検討されています。

こうした状況の中、DESKは、ドイツ・ヨーロッパ

研究に関わる学生の学びと研究、また、ドイツをはじめとする国際的な交流の機会を維持、強化していくために何が出来るか、寄付元であるDAAD（ドイツ学術交流会）との話し合いや、世界各国のドイツ・ヨーロッパ研究センターおよび他大学との交渉を継続して参りました。2020年度のDESK活動計画については、まだ検討中、交渉中の事柄も多くありますが、すでに方針が決定している以下4点について、ご報告申し上げます。

1. DESK奨学助成金による国内での研究遂行支援

DESK奨学助成金は従来、寄付元のDAADの意向を受けて、学生、教員の留学や研究のための海外渡航費（旅費・滞在費）への助成を中心に運用されてきました。新型コロナウイルス感染拡大に伴う措置として、今年度の奨学助成金は、こうした渡航費に限定せず、日本国内におけるドイツ・ヨーロッパ研究の遂行を全面的に支援するための特例的な運用を行います。詳細はDESKホームページでご確認ください。

2. パートナー校からのオンライン授業の提供

DESKのパートナー校であるドイツ・ギーセン大学政治学部のド・ネーブ教授（Prof. Dr. Dorothee de Nève）のご厚意で、2020年4月21日よりギーセン大学で開講されている「現代ドイツ政治・社会入門」のオンライン講義（英語・全12回・週1回）を特別に提供していただいております。すでに、ESP（欧州研究プログラム）の学生をはじめ、10名を超える学生が受講しています。ドイツ現代政治・社会システムをテーマにした留学生向けの授業で、政治学が専門でなく、基本的な知識を身につけたい方にとっても、最新の知識に触れたいという方にとっても魅力

的な内容となっています。

3. ドイツ人留学生との交流会の開催

DAADのご協力のもと、現在、ドイツから日本へ留学しているドイツ人学生との交流会を企画しています。ESP、IGK、TLPプログラムなど、DESKと関わりのある学生を中心に、2020年6月11日（木）17時より、初めての交流会が開催される予定です。

4. 国際会議等のオンラインによる実施

ギーセン大学（ドイツ）・中央大学校（韓国）・東京大学の共催によるPAJAKOワークショップについても、オンラインによる実施が決定しました。また、イスラエルのハイファ大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター（Haifa Center for German&European Studies）との間でも、オンラインによるコロキウム開催の企画が進行しており、若手研究者やIGKプログラム所属の博士課程学生が、ドイツ語での口頭発表に向けて意欲的に準備を進めています。

新型コロナウイルスの感染拡大によって、国際交流の活動は確かに大きな制約を受けています。他方で、この事態は、期せずして、オンラインでの勉学や研究の機会を拡大させることにつながってまいります。DESKは、この状況下であるからこそ見えてきた可能性を最大限に活用し、出来る限りの研究支援と国際交流を続けていきたいと考えております。関係者の皆さま、学生の皆さまからも忌憚のないご意見、ご要望をお寄せいただければ幸いです。今後とも変わらぬご支援、ご協力のほどを、どうぞよろしくお願い申し上げます。

III 欧州研究プログラム

欧州研究プログラム（European Studies Program ESP）は、EUを中心とした統合が進み、政治・経済・社会のあらゆる方面で既存の秩序が変容しつつある現代欧州について、最新の研究方法と正確な知識、それに基づく洞察力を養い、日欧の架け橋として社会の様々な方面で活躍する「市民的エリート」を養成するプログラムです。ドイツ・ヨーロッパ研究センターは、駒場キャンパスにある豊富な研究と教育のための人材を中心に、本郷キャンパスの教員の支援もおおぎながら、この教育プログラムの調整にあたります。

2020年度ESP新規登録生

氏名	所属	研究テーマ
金田懐子	総合文化研究科言語情報科学専攻	ドイツ語話者移民コミュニティにおけるドイツ語の方言接触
富岡昇平	総合文化研究科地域文化研究専攻	東ドイツ体制批判運動と1989年平和革命
村瀬泰菜	総合文化研究科国際社会科学専攻 (関連社会科学)	生殖テクノロジーの実状と法制度に関する比較社会学的研究：チェコと周辺EU諸国を中心に
山本和輝	総合文化研究科国際社会科学専攻 (関連社会科学)	カール・シュミットの政治思想におけるホップズとクライストの意義
吉野真理子	総合文化研究科超域文化科学専攻 (比較文学比較文化)	19世紀ドイツ語圏における標題音楽思想

IV

日独共同大学院プログラム

日独共同大学院プログラム(IGK)は、日本とドイツの双方の大学が協力して大学院博士課程の教育研究を共同で行い、プログラムに参加する学生が出身大学において博士号を取得することを支援するものです。2007年9月から2017年8月までの期間、東京大学大学院総合文化研究科とハレ大学のあいだで集中的な学生・教員の相互派遣を行ないました。

ドイツ・ヨーロッパ研究センターは、この10年間にわたる成果と実績を受け継ぎ、大学院総合文化研究科の博士課程教育プログラムとして設置された「日独共同大学院プログラム」科目の運営に引き続きあたります。現在はこの「日独共同大学院プログラム」を中心に、ドイツ・ヨーロッパ研究センターが提供する修士課程プログラム「欧州研究プログラム」とも連携しながら、ハレ大学をはじめとするドイツのパートナー大学（ギーセン、ボン、ベルリン、ケルン、デュッセルドルフ等）との協力の下、日独の大学院における国際的な学術交流を促進し、若手研究者養成と国際共同研究の充実に努めています。

研究計画

ブラームス受容とドイツのナショナリズム
—20世紀初頭からナチス期に至るまで—

2020年度IGK新規登録生
石井萌加

19世紀ドイツの作曲家ヨハネス・ブラームス (Johannes Brahms, 1833-1897) を対象とする本研究の目的は、ブラームスが、ナチス期に至るドイツの政治的・社会的変化の中で、ナショナリズムに適応する作曲家として受容されていく過程を明らかにすることである。修士論文では、ナチス体制下初期のブラームス受容が非常に人種主義的なものだったことを明らかにした。そのような人種主義的な作曲家像は、どのような言説の中で形成されてきたのかについて、より「長期的」な視点で作曲家像の「変化」を考察する。

ナショナリズムが最高潮に達する20世紀前半のドイツにおけるブラームス受容について、従来の多くの研究では十分な資料調査を経ることなく、ほとん

ど無視されているというのが実情である。そのため戦後から現在に至るまで、「ナショナリズムとは縁遠く」、「人種主義的に解釈された〈罪〉を持たない」ブラームスのイメージが共有されてきたといえる。人種主義的なナショナリズムが高まる当時のドイツにおいて、ブラームスに対してどのようなイメージ（作曲家像）が付与されていたのか、検証されなければならない。

博士論文では、以下に示す複数の言説を分析する。分析では、著者の立場や掲載される媒体、その読者、政治的状況などの「コンテキスト」に注意を払うことで、時代に適応するように描かれる作曲家像を精緻に捉えることを試みる。なお、テキストの選択や分析においては、人種主義的な作曲家像のみを抽出した表面的なものにならないよう考慮する。

第一に、著作物でのブラームスに関する言説の分析を行う。まず、人種主義（北方ゲルマン民族至上主義）の文脈でブラームスを「北方的」作曲家として評価したW. Niemannによるブラームス伝 (W. Niemann: Brahms, 1920.) を精読し、ブラームスの

どのような点に「北方性」が認められているのかを把握する。とりわけ後半の作品解説部分において、どの作品がいかなる点で「北方的」であると主張されているのかを掴む。その際、比較されている北ドイツの作家（ヘッベル、シュトルム、グロート）の特徴についても調査する。ブラームスが亡くなった1897年以降、伝記や回想録などが立て続けに出版されているため、それらと比較することで、伝記的著作におけるブラームス像の変化を捉えることが可能となる。また音楽史の著作物におけるブラームス記述を調査し、時代や著者によって異なるブラームスの音楽史的な位置づけを捉える。

第二に、ブラームスの作品を取り上げた当時の演奏会の調査と、そのプログラムや演奏批評等の分析を行う。ブラームスの生誕・没後の節目となる時期を中心に、メモリアルな演奏会や音楽雑誌でのブラームス特集を調査する。調査を通して発見された

注目すべき演奏会については、演奏会プログラムや新聞・音楽雑誌での演奏批評を収集し、それら进行分析する。また、特定の作曲家に関する大規模な特集がなされることが多い音楽雑誌『音楽雑誌Zeitschrift für Musik』と『音楽Die Musik』を用いて、ブラームスについての特集の有無を調査し、ブラームスがどのような作曲家として記述されているのか、当時のナショナリズム思想の影響を受けているのか、という視点で言説进行分析する。

複数の言説进行分析することによって、ドイツが第一次世界大戦を経てナチス期に向かう時代のブラームス像を、「多面的に」捉えることを試みる。そして、政治的・社会的変化の中で、ブラームスに付与された作曲家像がいかに変化していったのか、またナチス体制下初頭にみられた人種主義的な作曲家像へ向かう連続性があるのかについて考察する。

研究計画

1890—1930年代ドイツ圏における生命論
——「人造人間」を中心とした科学と文学の交錯

2020年度IGK新規登録生
相馬尚之

本研究の主旨は、1890—1930年代のドイツ圏における科学とりわけ生物学の成果や思想の発展と受容を踏まえつつ、当時の「人造人間」表象を中心に科学思想と文学の交錯の様態を検討することで、当時の生命観を明らかにすることである。

生命とは何か、という問いに対しては生氣論、機械論など数多の議論が展開され、19世紀後半以降の西欧においては進化論が絶大な影響力を有した。だ

が進化論は、生物学や哲学のみの問題ではなく、その通俗的な拡張や文学への作用も含め、有機体の存在様式をあらゆる知の形式が問い直す契機であった。生命論は確かに科学上の発見とも関係するものの、客観的事実の蓄積を超える射程をもとより有しており、それに基づき形成された思想を捉えるには、言説の広範な横断性が分析されねばならない。自然科学と人文科学は、絶えざる相互作用を通じて知を（再）生産しており、この学際的な研究では、ある領域における知識や観念が分野を横断する際に被る変容と緊張を明らかにすることを通じて、その時代の文化的経験を捉えることが重要である。

「人造人間」は、文学と科学の関係を検討する際にたびたび取り上げられる主題である。ロマン派文

学の自動人形モチーフと機械論の興隆及び産業革命の相関、あるいは現代のSF作品に対する生命科学及び人工知能の影響等は、多くの批評家の注目を集めている。本論文の対象とする19世紀末から戦間期にかけても、文学上のロボットや改良人間に対する工業の発展および遺伝学や優生思想の影響が数多く論じられてきた。だが、これらの研究の多くは個別の作品の分析あるいは人造人間表象の通史内での言及が中心であり、世紀末以降に人間の特別な位相を崩壊させた進化論が大衆にも普及し、科学が専門知識としての領分を超えて社会のあらゆる面に及ぶ世界観の形成を試みたなかで、科学と文学の混淆が「人造人間」を顕在化させた意義を問うてこなかった。

そこで本論文では、1890—1930年代のドイツ圏における科学の展開を踏まえつつ人造人間に関する言説を中心に分析を試みることで、科学と文学の交感の様相を捉えることを目指す。とりわけ科学思想に関しては、当時ドイツ圏で大きく発展していた生物学とその背景を成す「一元論」に、文学作品に関してはハンス・ハインツ・エーヴェルス (Hanns Heinz Ewers 1871–1943) に焦点を当てることで、当時の科学のそもそもの越境的傾向、文学における科学の変容、そしてそれらから浮かび上がる当時の生命観を検討する。

19世紀後半に進化論をドイツで広めた生物学者エルンスト・ヘッケル (Ernst Haeckel 1834–1919) は、生物学の実証科学化を目指し、有機物と無機物の間の本質的な差異を否定し、独自の実体一元論を提唱した。彼は1906年にドイツ一元論者同盟を設立し、この同盟には生物学者ジャック・レープ、性科学者マグヌス・ヒルシュフェルト、生理学者リヒャルト・ゼーモンらも参加した。彼らは生氣論を排

し、受精や発生、本能や記憶といった生命現象を物質と化学反応に基づいて説明することを目指したが、ヘッケル流の一元論の特殊性は、その世界観に基づき生物学における発見の普遍性を過剰なまでに強調し、人間のみならず無機物や社会にも応用しようと試みた点にある。ヘッケルらは、有機体の活動を機械的に解明するのみならず、無機物にも生命的現象があることを訴え、また一方では生物界の淘汰や共生を人間社会の原理としても用いることで、人間や動物、無機物の振る舞いの見かけ上の相同の背後に質的な同一性を追究し、同時に無機物からの生命の極限たる人間に至る連続性を示唆した。そのため一元論者の科学主義は、機械的な法則の探究と共に、専門の境界を無視するためのいかがわしさを帯びることになった。

本論文が中心的に取り上げる作家は、エーヴェルスである。彼はナチスへの協力のために1970年代に至るまでほとんど研究されず、以後も通俗作家として文学では低い評価を受けてきたが、近年では大衆文化やジェンダーなどの観点から注目されている。確かにエーヴェルスの作品は通俗的で現実を破る幻想を十分に働かせたとは言い難いかもしれないが、それ故に現実的な科学により接近している。本論では、エーヴェルスがドイツの伝統的な文学の素材を援用しつつも当時最先端の科学の成果を取り込んでおり、また専門の科学者による排他的な営みを批判し作家による科学の啓蒙活動を試みた点に注目することで、彼の作品に表れる専門知が媒体を横断する際の変容および分野間の知の緊張に着眼する。

博士論文は、当時の生物学者の著作を通じた科学思想と文学作品の分析から構成される。第1部では、当時の生物学が生物の無機物への還元を進めた

ことで、その極限として人間の誕生や行動の人為的操作可能性が科学者にも文学者にも夢想され、生命が解体される一方で生命の創造可能性が構想されたことを明らかにする。第II部では、無機物の生命的現象および社会的生物をとりあげることで、表面上の類似性の研究と、その背後に迫ろうと試みた一元論の問題を焦点化する。一元論的世界観における、有機物の無機化とあらゆる現象の生命化の二つの潮流の緊張の間に、人造人間が姿を現すことになる。

第I部では、ヘッケルの一元論者同盟に参加した生物学者達の著作を整理したうえで、文学作品における人造人間表象を分析する。ヘッケルは『宇宙の謎』（1899）の中で独自の一元論を訴え、彼に影響された生物学者レープやヒルシュフェルトは、生理学的な実験を通じて生命現象の機械的説明と支配を試みた。この当時の科学思想の「人造人間」構想への潜在的な親和性を踏まえつつ、エーヴェルスの『アルラウネ』（1911）および『フントフォーゲル』（1928）をとりあげる。エーヴェルスは、これらの小説において当時の科学を参照しつつ人工授精や性別適合手術を題材化した。第一次世界大戦前後の、既存のあらゆる規範が動揺し頽廃への懸念が高まる時期に、人体の生理学的操作を通じて、男女の性や人間創造の管理が描かれたことの意義を問う。

第II部では、無機物の側から有機物への発展可能性について検討する。一元論のもとでは、有機体が無機物と同様の法則によって説明されるのみならず、その法則の同一性ゆえに、無機物にも有機体と同様の力が認められる。結晶体に見られる成長や記憶のような生命的現象に関し、ヘッケルの『結晶の魂』（1917）とこれに大きく影響を与えたゼーモン

『ムネーメ論』（1904）を整理し、一元論的世界観下での無機物からの生命の可能性を整理する。文学テキストとしては、エーヴェルス『蟻』（1925）、リー・トッコ（本名ルートヴィヒ・デクスハイマー）『オートマタ時代』（1930）、テア・フォン・ハルプー『メトロポリス』（1926）をとりあげる。当時の生物学の動物から人間や社会に向かう越境的傾向と、文学における科学的想像力の動態の交錯から、社会的生物としての人間の位置および無機物から構成された機械が問い直される。生物学を支配した進化論的言説は、なぜ人間社会のみならず、無機物あるいは機械の発展を説明する論理としても援用されることが可能であったのか。機械と有機体の類似に対する行動主義的理解とヘッケル流の一元論の対照性を踏まえつつ、機械的人造人間における生命性について検討したい。

結論では、これまでの議論をもとに、世紀末から戦間期のドイツ圏において人造人間が構想されたことの意義について論じる。万物の普遍的原理を追究し、有機体を無機物化する一方であらゆるものを生命化した一元論の招来した人造人間は、有機体の改造ないし無機物の生命化を通じて、追試不可能な系統発生を人為的に加速させる挑戦となった。文学作品は、社会規範の流動化する中で不遜な科学思想を批判的にも変容させたが、実際の驚異を前に怪奇性を失い、現実には横滑りしていった。本論はこれらの成果をまとめ、科学と文学の相互作用を通じた生命に関する思想形成を明らかにすることを目指す。

研究計画

19世紀末から20世紀初頭ドイツにおける
同性愛概念の伝播と友情の再考
ーオイレンブルク事件をめぐる考察2020年度IGK新規登録生
瑞秀昭葉

本研究は、1906年に勃発したヴィルヘルム帝政期ドイツの一大同性愛スキャンダルであるオイレンブルク事件（1906-1909）を契機として、同性愛の概念が人口に膾炙する様子と、それに伴い、既存の友情関係が再考を迫られる様子を詳らかにすることを目的としている。

19世紀後半に急速に産業化、および都市化が進展したベルリンでは、輝かしい近代化の反面、出生率の低下、乳児死亡率の上昇、売買春問題や性病の蔓延、ポルノグラフィの流通など、性的主題が深刻な社会問題として浮上するようになった。これに伴い、性をめぐる様々な言説が堰を切ったように氾濫することとなった。イギリスでオスカー・ワイルド事件（1895）が勃発し、ドイツでもクルップ事件（1902）が起こると、同性愛もまた社会問題として注目を浴びるようになった。とりわけ、ドイツ帝国だけでなく、ヨーロッパ全体を震撼させたとされるのがオイレンブルク事件（1906-1909）である。新聞が事件の詳細を報じると、事件を揶揄する様々な風刺画や風刺小唄が流通し、人々は同性愛について口々に語り始めた。その意味で、オイレンブルク事件は「同性愛（Homosexualität）」の語が人口に膾炙する重要な契機となったのだった。

オイレンブルク事件は、ジャーナリストのマキシミリアン・ハルデン（Maximilian Harden, 1861-

1927）が、政治雑誌『未来（Die Zukunft）』に、皇帝ヴィルヘルム二世とその側近たちの同性愛関係を暴露する一連の記事を掲載したことに端を発する。「リーベンベルク円卓（Liebenberger Tafelrunde）」と呼ばれたこの集団が、男性同士で親密な関係を結びながら、政治的に重要な決定を行っていたことが報道によって明らかにされた。このホーエンツォレルン家の威信を損なう報道を受けて、リーベンベルク円卓の成員の一人、クーノ・フォン・モルトケ伯爵（Kuno von Moltke, 1847-1923）が、名誉毀損でハルデンを訴え、事件は法廷に持ち込まれることとなった。

男性間の同性愛行為を「自然に反する淫行」として取り締まった刑法175条の立法を背景に、19世紀後半のドイツでは、同性愛は「悪疫」として忌避されていたものの、その実態は未だ解明されておらず、「同性愛」の語も専門家集団のみが用いる術語であり日常語ではなかった。このような状況を鑑みて、1890年代に心理学から分岐した性科学は、同性愛と同性愛者の実態の解明に向け奮闘し、同性愛に関する科学的知見を一般に教授するとともに、刑法175条の撤廃も目指した。当時新たに台頭したこの同性愛解放運動と合わせて検討することで、オイレンブルク事件の社会的意味は一層明らかになる。

一連の裁判では、リーベンベルク円卓の親密な関係ーとりわけ、モルトケと、皇帝の腹心として知られたオイレンブルクの間関係ーが、同性愛であるのか、それとも友情として認識可能なものであるのか否かが争点となった。同性愛解放運動の旗手であり、「科学的ヒューマニズム委員会」[Wissenschaftlich-humanitäres Komitee]の創始者、性科学者マグヌス・ヒルシュフェルト博士

(Magnus Hirschfeld, 1868-1935) も、同性愛の専門家として法廷に召喚され、モルトケを「科学的」に鑑定する役目を担った。「女性への嫌悪」、「男性への並外れた好意」、「音楽的、詩的才能といった例に見られるような、特定の女性的素質の存在」を論拠にモルトケを同性愛と判定したヒルシュフェルトの鑑定結果は、マスメディアによって拡散され、同性愛者のステレオタイプを創出する契機となった。また、「アイゲネ共同体 [Gemeinschaft der Eigenen]」の創始者で、ヒルシュフェルトと敵対していた活動家のアドルフ・ブランド (Adolf Brand, 1847-1945) も、裁判に介入し、自身の同性愛理解—同性愛と友情の二分化を退けた友情愛の概念—を展開したのだった。

オイレンブルク事件はドイツのジェンダー・セクシュアリティ研究において、政治史とジェンダー史の結節点として必ず取り上げられてきたものの、大半はスキャンダルとその後の裁判の展開の紹介にとどまり、その政治文化的な意義が十分に分析されてこなかった。特に、同性愛行為を禁止する刑法175条の撤廃という共通した目標を掲げながらも、男性間の欲望について、異なる理解を展開したヒルシュフェルトとブランドの対立と関連づけてオイレンブルク事件を考察する意識はこれまで希薄であった。

そこで本研究では、なぜ、そして、どのように、同性愛の概念が、オイレンブルク事件を通じて、専門家集団を超えて人口に膾炙するに至ったのだろうかという問いを設定し、その伝達経路を明らかにすることを目的としている。この際に、同性愛概念の導入によって既存の友情関係が再考を迫られる様子にも目を向け、同性愛と友情の緊張関係にも照射する。加えて、当時専門家集団内で共有されていた同

性愛理解にも目を向け、オイレンブルク事件を通じて、彼らの主張がどのように形を変えて、一般に伝播し、そして、それが刑法175条撤廃運動にどのような影響を与えるに至ったのかという点も検討している。

博士論文では、①オイレンブルク事件の詳細な展開、②同性愛解放運動の展開、③マスメディアによる①の拡散、④教養市民層による同性愛概念の受容、の4点を検討することで、上記の問いを明らかにする予定である。

第1章では、オイレンブルク事件が、政治的スキャンダルとして成立する過程に加え、一連の裁判において、司法が「リーベンベルク円卓」の関係を同性愛、もしくは友情としてみなし、それに基づいて判決を下す様子を、性科学者ヒルシュフェルトと、活動家ブランドがそこで果たした影響に着目しながら検討する。この際、裁判史料と当時の新聞報道に依拠して事件の再構成を試みる。

第2章では、同性愛解放運動を牽引した二つの組織—「科学的ヒューマニズム委員会」と、「アイゲネ共同体」—による同性愛理解を両組織の機関紙を中心に分析し、裁判内でのヒルシュフェルトとブランドの主張の論拠を検討する。

第3章では、マスメディアが、オイレンブルク事件について報じる際に、激しい同性愛嫌悪と反ユダヤ主義を展開した様子を検討する。ヒルシュフェルトとブランドだけでなく、事件の重要なアクターたちが、新聞・雑誌記事、風刺画、風刺小唄でどのように表象されたかを検討する。

第4章では、刑法175条撤廃運動の有力な支持基盤であると同時に、マスメディアの影響を最も顕著に受けた教養市民層に焦点を当て、オイレンブルク事

件後に人々が自身の性生活を見直し、同性愛と友情の相違点について再考した様子を検討する。具体的には、オイレンブルク事件以降、百科事典および会話辞典、また、礼儀作法書において、友情と愛情の相違点が強調される様子を検討する。加えて、オイレンブルク事件によって同性愛概念が一般に伝播さ

れて初めて、妻に自身の同性愛を告白することのできたヒルシュフェルトの患者の事例を検討する予定である。

IGK登録生として、ドイツ近現代史研究の一助となるような博士論文を執筆できれば幸いである。

研究計画

市民層エリートとドイツ関税同盟
統一国家なきドイツの対外的代表と全国議会の形成

2020年度IGK新規登録生
峯沙智也

ドイツ帝国成立に至る時代に、ドイツ全国的な政治および経済活動の形成に対して、市民層エリートのドイツ関税同盟をめぐって繰り広げた論争および実践が果たした役割に着目する研究はいまだに乏しい。

市民層エリートの役割を再検討する理由として、従来の研究の傾向および問題として、さしあたり次の三点が挙げられる。第一に、統一国家の成立を希求するナショナリストの言説を扱う際に、同時代人の認識カテゴリーと今日の研究者が用いる分析上のカテゴリーを混同する傾向にあったこと、第二に、ドイツ関税同盟の制度改革論争は、ドイツ諸邦の政治家や官僚、経済的市民層などのドイツ全国レベルの政治および経済問題を論ずる幅広い分野のアクターが関わっており、政治と経済を峻別することが不可能なように、複数の分野を跨いだ視座が必要であったこと、そして第三に、ドイツ帝国成立期をグローバルな視角から捉える試みが緒に就いたばかりであり、特に海外の諸地域との連関を見越して変容しつつあるドイツ地域の政治や経済事情、およびそれらをめぐる議論に関する更なる研究が望まれることが挙げられる。

本研究は、ドイツ関税同盟を舞台として、市民層エリートがドイツ諸邦間の境界を超え、ドイツ地域を全体として捉えた全国的な政治および経済活動を形成する過程の分析を課題としている。

ドイツ関税同盟は、統一国家なき時代にドイツ諸邦を経済的に取りまとめた枠組みと評価される。関税同盟との名前が示唆するように、加盟邦間の関税率を調整し、対外的には保護貿易政策を敷き、ドイツ地域の産業を育成する狙いがあった。確かに、ドイツ関税同盟は、1834年の成立以来、同時代人によって関税同盟成立による経済的な影響を論じる研究をはじめとして、これまで多様な研究の対象になってきた。いわゆるプロイセン学派の代表的な歴史家ライチュケ（1834-1896）が提示した古典的テーゼ、すなわち、ドイツ関税同盟はプロイセンによるドイツ統一に向けた経済的な足掛かりであるというテーゼは、多様な視点からの検討の結果され、乗り越えられている。しかし、近年まで1871年のド

以上の研究状況および研究動向に鑑み、博士論文では、ドイツ関税同盟を舞台として、市民層エリートがドイツ諸邦間の境界を超え、ドイツ地域を全体として捉えた全国的な政治および経済活動を形成す

る過程を分析する。その際に、以下の4つの局面を扱う。それらの局面は、博士論文の各章を構成する予定である。

第一章では、商業問題および関税同盟の制度改革を論議する市民層エリートの結社、特にドイツ通商大会およびドイツ国民経済学者会議、に焦点を当てることで、「関税議会 (Zollparlament)」の構想史を扱う。関税議会とは、1868年にドイツ関税同盟の機関として設置された議会であり、ドイツ関税同盟加盟邦の各地から選出された議員で構成された。従来の研究では、確かに、ドイツ関税同盟やビスマルクのいわゆるドイツ統一戦争期の構想に関する研究は、数知れない。しかし、関税同盟に議会を設置するという関税議会構想が商業活動のために構想され、次第に、ドイツ全土から代表者が集う議会へと構想の内容が変容し、具体化された過程は知られていない。それゆえ、本章では、ブレーメン商工会議所附設文書館やプロイセン枢密文書館に所蔵されている市民層エリートの結社に関する史料を用い、関税議会構想の系譜を描く。

続く第二章は、万国博覧会等の産業展覧会においてドイツ関税同盟がいかに関税同盟を代表し、生じる問題に対処したのか、という問いを扱う。統一国家なき時代において、ドイツからの出展を巡ってその窓口となった市民層エリートの組織や、参加者の経験およびその語りに着目することで、いかにして、商業活動に従事する市民層たちが、ドイツという枠組みを意識するようになる過程を扱う。1860年代の産業展覧会のための準備過程での議論は、単に産業製品の展示だけに留まらず、どこまでをドイツ地域とみなして人口数を計算するべきか、誰が英仏などの諸外国との出展を巡る交渉に関与するか、などと

必要に迫られた形でネーションの境界を策定する議論も行われた。こうした議論では、時にドイツ地域の国勢調査の必要性が強調され、関税率の調整をめぐる議論や、時には将来の統一国家におけるドイツ諸邦の税負担割合を設定する議論に発展することもあった。

第三章では、ドイツを代表する旗の制定や領事館の設置をめぐる市民層エリートの議論を分析する。1840年以降、対外貿易に際してドイツ関税同盟加盟邦の旗を設定することが度々検討された。旗をめぐる問題は、1848年の革命などの多様な政治経済的な動乱により中断されながらも、1860年代にも重大な議題として市民層エリートの結社でも継続的に議論されていた。1860年前後には東アジア地域とも通商交渉を始めており、領事館や旗の問題がいかに議論され、グローバルな通商関係へドイツ諸邦が組み込まれる準備を進めたのか、描くことが本章の課題である。

第四章では、「新時代」と呼ばれる1858年以降、市民層エリートが度量衡や通貨交換比率の調整、商法典の制定をめぐる議論を通じて、いかにドイツ経済圏の変容に影響を与えたのか、という問いを扱う。通常は関税同盟の年次総会が決定する事項に関して、市民層の組織は多様な形でロビー活動を行った。その中でも、邦を超えた範囲で活動する際に重要なのは、ドイツ全土に通用する商法典の制定をめぐる議論である。この議論には、関税議会構想に関する議論でも活躍したハンゼマンも関わっている。プロイセン枢密文書館所蔵のハンゼマンの個人史料や、ドイツ各地の文書館の関税同盟関連史料を用い、ドイツ経済圏の変容過程に対する市民層エリートの影響を分析することを本章の課題とする。

以上のような研究を通じ、統一国家なき時代において市民層エリートがドイツ地域の全国的な政治および経済に果たした役割に関して新しい知見をもたらすことが出来る。また、統一国家の形成過程を、一国中心史観を脱し、グローバルな観点で検討する

可能性を開くことにもなろう。そして、今日ブレグジットなどを通じ、今日に問い直されている複数の国家の統合の可能性と限界を考える際に、一つの参照軸を提供することが期待される。

V PAJAKOギーセン大学ワークショップ

参加記

超域文化科学専攻修士課程
濱崎千波

はじめに

このプログラムは2020年2月17日から21日までギーセン大学を主な開催地として行われました。プログラムの軸は、自分の専門と関連する研究を行っているギーセン大学の先生との研究相談で、その他にも参加者全体でのディスカッションや研究発表、さらに近隣都市への遠足が組み込まれており、とても内容の濃い5日間でした。このレポートではプログラムの内容を時系列に沿ってまとめたいと思います。

1日目 (2/17)

プログラムの初日であったこの日は、アイスブレイクも兼ねたディスカッションセッションから始まりました。まずは「バディ」としてプログラムをサポートしてくれるギーセン大学の学生の方々も含めた参加者全員で自己紹介を行い、研究内容、プログラムに対する抱負の紹介をお互いにしました。自

分の研究内容について発表する機会があるとのこと事前に伝えられていたので、研究紹介のパワーポイントを作っていったのですが、これは結局使用せず、セッションは円形に椅子を並べてお互いに発表するといったとても砕けた雰囲気で行われました。しかしパワーポイントはプログラムに先立って自分の研究内容をまとめる練習になり、2日目以降の研究相談で手短かに研究内容を説明する際に役立ったので、事前に準備をしておいてよかったと感じました。

そしてその後プログラム全体の簡単なオリエンテーションが行われた後に、オーガナイザーのde Nève先生から現代における科学的・専門的研究の意義についてプレゼンテーションがありました。このプレゼンテーションやその後の参加者同士の議論を通して、学術的研究においては専門性や正確性、新しさといった学問としての水準を満たすことはもちろんのことながら、研究の成果を社会における課題の解決に生かすことが重要であると改めて感じました。レヴィナスの政治思想という私自身の研究テーマは思想研究の要素が強く、思想家の個別的な事情や主張を細かく分析することについて目が行きがちですが、このセッションは自分の研究の中で思想の全体像を見渡して、現代の社会的課題の解決にど

のように結びつけられるかを今まで以上に意識するきっかけになりました。

2日目 (2/18)

この日は朝からバディの皆さんの案内のもと、プログラムの参加者全員でギーセンの近隣都市に遠足に行きました。午前中の行き先はハダマーで、ここには第二次世界大戦時のナチス政権下で行われた優生政策である「T4作戦」の際に使用された強制収容所がメモリアルセンターとして残っており、こちらを尋ねました。この強制収容所は元は精神病院の施設でしたが、T4作戦が実施されるとナチスが借り上げ、精神的または肉体的に「不適格」と判断された人々をヘッセン州を含む近隣の州から集めて、「強制断種」という名の虐殺を行った場所です。建物の外や地下にはこのような優生政策の際に作られ用いられた駐車場や地下のガス室がほとんど残っており、それらを見学した後、ガイドの方からナチスドイツがどのように施設に送る人を選んでいったのかの説明を受けました。

ガイドの方は収容者の選定の際に用いられた診断書を見せてくれて、ナチスドイツはこの一枚の紙のみに基づいて、機械的に収容候補者を選定していたという点を強調されていました。またバスで送られて施設に収容された人の多くはその日にガス室で殺され、そうでなくても家族との面会が禁じられたまま過ごし、同じ結末を辿ったそうです。収容者のなかの何人かについての展示がセンターのホールに掲げられており、その中には家族に対して面会を回避するための嘘を書いた手紙もあって、行われたことの残酷さにやるせない気持ちになりました。それと同時に、アーレントやレヴィナスの糾弾したナチス

ドイツの全体性とは、まさにこのようなわずかな情報に基づく機会的な判断により残虐な政策を行うという徹底的な個人の軽視のことだと思い、想像を絶する体験した彼らの主張がどこから湧いていたのかという点に少しだけより実感を持つことができました。

午後はハダマーから電車で30分ほどの都市、リンブルグに移動し、現地のガイドの方と一緒に市内見学をしました。リンブルグはライン川の沿岸に位置し、12世紀中頃から建てられた木組みの家々や、同じく古い歴史を持つ大聖堂有名な街です。主に旧市街を見て回ったのですが、市民の方が築100年は優に超える木組みの家を文化財あるいは住居として、どのように保存、修復しているかを窺い知ることができました。

3日目 (2/19) 、4日目 (2/20)

この2日間は研究相談を行いました。研究相談をしてくださる先生は参加者の興味関心によってそれぞれアレンジされていたのですが、私の場合はde Nève先生と、同じく政治学科で政治思想を中心に研究されているÖzmen先生に修士論文について相談をしました。

まずÖzmen先生との面談では、大きく分けて2つのことを指摘していただきました。1つは研究の中で取り上げる問題をより絞ることで、もう1つは私の研究と他の政治哲学分野との関連についてです。1つ目については自分でも以前から感じておりながらどのように対象を絞ればよいのかが分からずいたので、その点について質問をしたところ、現時点の研究計画の中に含まれる複数のリサーチクエスチョンを把握し、それらの中からよりシンプルに論

文を書けるように取捨選択を行うことが大切と教えていただきました。私の研究計画には、レヴィナスの政治に関する思想はどのようなものかと、それを実社会にどのように応用できるか、という2つのリサーチクエスチョンがあり、いずれもそれぞれ広範な調査が必要となるため、いずれかに絞ることを勧められました。そしてまた2つ目についてはテーマについて研究を進めるなかで助けになるということで、ハンナ・アーレントの思想や現代の難民・移民問題に関する政治思想を合わせて参照するとよいというアドバイスをいただきました。特にアーレントについては第二次世界大戦時下でのユダヤ人としての体験に思想の出自の一つがあるというレヴィナスとの大きな共通点を持っており、アーレントとレヴィナスを比較することで考察に幅が生まれるかもしれません。また現代の難民・移民問題についてはレヴィナスの思想をどのように現代の課題に生かせるかという点について私が自分から質問したのですが、ブックリストをいただいたので、問題全体像のより深い把握を行なって実際に考察に活かせるかどうかを検討したいと考えています。

次にde Nève先生との面談では、リサーチクエスチョンをより明確にするべきであることを指摘していただきました。リサーチクエスチョンを一つ設定し、その問いの答えを発見するというのが論文の基本的な形であり、良い問いを見つけることが研究において最も重要かつ難しいことを改めて感じました。またÖzmen先生との面談でアーレントをレヴィナスに合わせて参照することについてアドバイスをいただいたことを話すと、両者を表を用いて比較し整理してみることを勧められました。自分では思想研究にこのような考察方法を用いることは思いつか

なかったもので、ぜひ資料が揃ったら行おうと思いません。

5日目 (2/21)

あっという間に最終日となった21日は、ヴィースバーデンへの遠足とクロージングセッションを行いました。ヴィースバーデンではヘッセン州資料館 (Hessian State Archives) を訪ねました。この資料館にはヘッセン州に関するものを中心に多くの資料が所蔵されており、中には中世の教会に関する資料などかなり古いものもあるそうです。ここでは職員の方にアテンドしていただきつつ、資料の保管の様子や修復室で紙の修復を行なっている様子などを見学しました。私の研究では思想家の著作やそれに関する研究書を読むことが中心で歴史的な資料に触れる機会があまりないため、とても新鮮で興味深かったです。

その後ギーセンに戻ってからのクロージングセッションでは、参加者各自で研究内容を改めてポスターにまとめ、プログラム全体を通して学んだことも含めてお互いに発表し合いました。1枚のポスターに発表内容を書く際には、プログラムの前と後で研究計画が変わった点を意識しながらまとめました。

終わりに

このようにプログラム中には先生方や他の参加者と自分の研究について紹介する機会が多かったので、自分でも研究テーマについてより理解が深まり、分かりやすく研究を伝えるためにどのような点について考察が足りないかを自覚できるようになったように思います。またバディはギーセン大学の博

士課程や研究機関に所属して研究を行なっている方々で、彼らから研究の話を聞くことで、研究者というキャリアについてもより明確にイメージができるようにもなりました。今回のプログラムで学んだ

ことはまずは修士論文に生かし、さらに将来のキャリアについて考える際にも参考にしたいと思いません。

VI

2019年度奨学助成金

ZDS-BA成果報告書

教養学部教養学科
地域文化研究分科ドイツ研究コース
中野瑛美

私は8月5日から29日まで約一ヶ月、DESKの奨学金を頂いて東大の短期留学プログラムとして提示されていたミュンヘン大学での語学研修(Deutschkurse—Learn German in Munich)に参加した。ここではその研修の概要について報告する。

概要

この研修は東京大学としては初めて行うものであり、東大からの参加学生は6人だった。ミュンヘン大学側が語学コースに加え宿と文化体験プログラムを準備しており、参加者は午前か午後いずれかの授業に参加することになる。まずは授業、宿、プログラムについてその詳細を記す。

授業について

授業は世界中から集まった生徒20名程度で行われ、クラス分けは渡航前にオンラインで行われた。短いテキストの中で単語が所々欠けておりその部分を埋めるという形式で、テキストの文脈を読み取る

力、単語力、語尾変化を正しく行う文法力が試されるものであった。私はB2.1のクラスになったのだが、周りの生徒との差を感じる日々だった。というのも私はこれまで約1年強、独学で文法事項をさらって学部の講読の授業を中心に受けてきたため、ドイツ語会話能力が他の生徒に比べて圧倒的に劣っていたのだ。文法や講読に関してはクラスのレベルについていけないことはなく今までやったことの復習程度のレベルだったのだが、英語を話すかのように流暢にドイツ語でコミュニケーションをとる周りの生徒に引け目を感じざるを得なかった。

授業は前半で宿題の確認と文法事項の説明と演習が行われ、後半ではあるテーマ(Gesundheit、Genussなど)に沿ったテキストを読んだりリスニングの練習をしたりという形式だった。先生が生徒を指名して答えさせるということは少なかったが、演習はほとんどすべてペアワークだったため生徒間のコミュニケーションはかなり活発で、話すことの多い授業だった。また休み時間も席の近い生徒同士は雑談することも多く、クラスの中で会話するという機会に恵まれていたように思う。また単語が出てこなかったりうまくドイツ語を話せなくても嫌な顔一つせず一緒に考えてくれるなど、ドイツ語を話せるようになりたいという思いをみんなが共有しているので下手なドイツ語でも話そうと思わせてくれる、

とても良い学びの場であった。そのため授業が始まってすぐはなかなか自分から話しかけることはできなかったのだが、だんだん雰囲気慣れてクラスの人とコミュニケーションを取れるようになったと思う。

成績評価については出席点と授業内で行う5つの小テストの平均点で決まる。小テストは文法(Syntax)、読解、独作文、聞き取りが2回であった。いずれもレベルは高すぎることはなかったが、1~5(1が最も良い)の成績評価の平均が3.25あることが条件であるようだ。

宿と現地での生活について

宿泊施設については事前に知らせてもらえず、ミュンヘンに着いてからレセプションに行き、初めて知るという形だった。私が宿泊したのは運よく教室から歩いて15分ほどの市内中心部のユースホテルで、女性専用で清潔感がありスタッフの方々もとても優しく、かなり良い施設であった。キッチンと同じフロアの人たちと共有するのだが、私の宿泊した部屋の並びはすべて東京外語大からきた学生だったため、宿での会話のほとんどが日本語だった点は少し残念だった。

現地での生活で一番大切なのが食事であるが、朝食は平日なら宿の無料で提供されるバイキングがあり、昼食はU-Bahnで1駅のところにあるミュンヘン大学のMensaで美味しく安く食べることができたため、夕飯の工面をすれば良いだけでかなり楽だった。キッチンに小さいながら自分専用の冷蔵庫もあったので自炊もしやすく、食費を抑えながら生活することができたと思う。また治安についてもミュ

ンヘン中央駅周辺はやはり物乞いなどもいて怖いと思うこともあるが、ホステルのあったUniversität駅周辺や教室のあったJosephsplatz駅周辺は閑静で治安も良く、日本にいる時と変わらないくらいであった。

文化体験プログラムについて

今回参加した語学コースにはいくつかの文化体験プログラムが組まれており、ミュンヘン大学全体のSommerfestに参加したり、Franziskanerなどのミュンヘンビールを製造するBrauereiを見学したりした。最終週に予定されていたEnglischer Gartenでの交流会は大雨のため中止になり、代わりにビアガーデンの割引チケット(5€引き)をもらった。

一番大きなプログラムだったのは、ヴィースの巡礼教会とノイシュバンシュタイン城の訪問だ。これには50名ほどの学生が参加し、バスで上記2施設を巡った。あいにくの雨でなかなか大変な思いもしたが自力ではなかなか行きづらい場所でもあったため、こうしてプログラムとして行けたのはとてもありがたかった。

週末について

上述した文化体験プログラムのない土日祝日もかなり多かったため、観光する機会に恵まれた。ミュンヘン市内の美術館や博物館、教会などはもちろん、郊外にあるダッハウ収容所やニンフェンブルク城にも足を伸ばすことができた。加えてニュルンベルクやアウクスブルク、オーストリアのインスブルックにまで日帰りで行くことができ、週末はこうした小旅行を楽しむことができた。

終わりに

今回私がこのプログラムに参加したきっかけは、いずれしたいと思っている1年間のドイツ留学に向けて、またドイツ語で書く卒論の準備のため、語学力を上げたいというものであった。その成果については、劇的な成長を遂げたというほどではないが、ドイツ語を話すということへのためらいが減ったということは自分の中ではかなり大きいと感じている。

3月に参加したTLPケルン研修の時は、英語の方が通じるし相手も嬉しいだろうと考えてしまい街中でドイツ語を使うことすらろくにできなかった。だが今回はドイツ語力が少しは上がっていること、また授業でドイツ語を話す機会に恵まれたことで自信が

つき、積極的にドイツ語を使うようになった。もちろんうまく聞き取れずに聞き返したりすることもあったが、中には私がドイツ語学習中なのを察してゆっくりドイツ語で説明してくれる店員さんなどいて、その優しさに助けられることも多かった。こうした体験はドイツに来ることではか得られなかったと思うし、参加できてとても嬉しく思っている。

最後に、奨学金の援助をくださったDESKの方々をはじめ、この留学を可能にしてくださった皆さまに感謝を申し上げます。

ZSP成果報告書

初期イエナ時代のヘーゲル哲学における 「学への導入」構想の再検討 ——「哲学の欲求」論の展開の観点から——

人文社会系研究科・哲学
飯泉佑介

イエナ時代とは、1801年にフランクフルトからイエナに移り住んだヘーゲルが、イエナ大学で哲学を講じる傍ら、カント、フィヒテ、シェリング、ラインホルト、ヤコービらと思想的に対決しつつ、独自の哲学体系の確立に取り組んだ時期のことを指す。断片や草稿を含むこの時期のテキストの整理・解読作業は、1960年代から80年代にかけてヘーゲル・アルヒーフの研究者らが精力的に行った文献学的研究によって著しく進展した。

しかし、それでもなお、1807年の『精神現象学』出版に至る思想形成の過程は十分に解明されていない。従来の研究では、『精神現象学』に決定的な影響を与えた思想的成果として、①『イエナ体系構想II』（1804/05年）の「論理学・形而上学」におけるいわゆる弁証法的方法の確立、②『イエナ体系構想I』（1803/04年）及び『イエナ体系構想III』（1805/06年）の「精神哲学」における近代的主観

1. 研究課題

本研究の課題は、G. W. F. ヘーゲルが初期イエナ時代（1801-03年）に構想した「学（＝哲学）への導入」というモチーフを、「哲学の欲求」論の展開という観点から再検討することである。この研究は、イエナ時代の末期に執筆された主著『精神現象学』（1807年）の根本モチーフの理論的解明とその形成過程に関する発展史解明に寄与することを目指す。

性の再評価などが挙げられてきた。だが、そもそも『精神現象学』は、その内実から見れば、形而上学への「導入」という役割をもつ論理学でもなければ、意識論や社会哲学といった特定の内実をもつ「実在哲学」でもない。『精神現象学』が「学への導入」という独自の課題を担う企てであることを考慮するならば、これらとは異なる発展史的起源が求められなければならない。

そこで注目されるべきは、初期イェナ時代（1801-03年）のテキストに散見される「哲学の欲求」論である。この考え方は、宗教や思想、文化において分裂と対立が極まった近代の教養段階において、それらを統一的に把握する絶対的な哲学体系が要求されるという歴史哲学的思想であり、報告者の解釈では『精神現象学』の基本モチーフの一つであるが、その萌芽は『差異論文』（1801年）、「信仰と知」（1802年）、「論理学・形而上学」講義断片（1801/02年および1802/03年）、「哲学入門」講義断片（1801/02年）などのテキストに認めることができる。本研究では、これらのテキストにおける「哲学の欲求」論に着目して、イェナ時代のヘーゲルの思想形成、特に「学への導入」構想を検討する。

2. 研究活動

今回のドイツ滞在では、主に以下の5つの調査研究を行なった。

フンボルト大学ベルリンおよびベルリン自由大学の図書館にて、ヘーゲル哲学の発展史に関する研究文献の調査・収集を行った。本邦の大学図書館に所蔵されている文献も少なくなかったが、日本では手に入りにくい近年の文献を中心に調査を行なう

ことができた。

若手のヘーゲル研究者たちによる研究会や読書会に参加した。主にベルリンに在住している院生や研究者の主催する会合に出席し、『精神現象学』や『自然法論文』の講読および議論を行った。さまざまな機会を使って交流を深め、意見交換や情報交換を行うことができた。

ベルリン・ブランデンブルク学術アカデミー研究員Dr. Christine Weckwerth女史と面会し、博士論文に関する相談を行った。『精神現象学』に関する単著があり、テーマや関心が報告者と近いWeckwerth女史からは、全般的に好意的な評価を受け、有益なアドバイスを多数頂いた。当初計画していた他の研究者や大学教員との面会は、夏期休暇期間による不在のため実現しなかった。

オルデンブルク大学で開催されたドイツ観念論に関するサマースクール（Summer School "Identität und Differenz in der Klassischen deutschen Philosophie: Fichte, Schelling, Hegel"）への参加。8月8日から10日にかけて、ドイツ各地から集まった博士課程の院生たちとワークショップに参加し、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルに関する基本文献の講読、「同一性と差異」の問題に関する集中的な討議を行った。二泊三日の企画だったため、参加者との対話や交流を深めることができた。

ボーフム大学のヘーゲル・アルヒーフにて、イェナ時代のヘーゲル哲学に関する原典調査を行った。複数の『精神現象学』初版本（刷りの異なるものを含む）、『差異論文』（1801年）の初版本、『批判的哲学雑誌』（1801-03年）の初版本を手にとることができた。また、イェナ時代ではないものの、ベルリン時代の未公刊講義録の記録を閲覧した。

3. 研究成果

以上の研究調査によって獲得された成果は、以下の二点である。

初期イエナ時代の「導入」諸構想の相互連関の解明

「学」への「導入」という『精神現象学』のモチーフは、基本的には、有限な認識から無限な認識としての「学」への移行という哲学的課題とその方法を意味するが、もともと初期のイエナ時代にはさまざまな「導入」構想があったとされる。W. ボンジーベンやM. バウムによれば、①論理学から形而上学へと移行する「論理学的導入」、②対立や分裂を固定化するカントやフィヒテらの「反省哲学」に対する内在的批判、③懐疑主義のうちに対立を統一する「思弁」の作用を認める「懐疑主義」論、④「意識」から「学」へと上昇する「主観的導入」、⑤対立と分裂が極まった近代の教養段階においてそれらを統一する「学」を成立させる「哲学の欲求」論などが、同じ系統の構想である。

『精神現象学』にはいずれの構想も含まれているが、その形成過程に関しては、①を重視する解釈が一般的である。それによれば、中期イエナ時代の論理学と形而上学は後期に入り内容面で統合され、後年の『大論理学』を準備する一方、もともと論理学が負っていた「導入」の役割を担う新たな部門として『精神現象学』が要求された（K. デュージング、久保陽一）。しかし、本研究は、『精神現象学』の根本モチーフの成立にとって決定的な要素は、むしろ④「主観的導入」と⑤「哲学の欲求」との理論的連関にあることを明らかにした。確かに、イエナ時代における「導入」としての論理学構想の発展が「主観的導入」の論理構造を洗練させたことは間違

いない。とはいえ、イエナ論理学の代替として『精神現象学』が要求されたという説明では、(1) 論理学と『精神現象学』との体系的位相の差異とその接続が見過ごされてしまう上に、(2) 「哲学の欲求」論との連関が視野に入っていない。本研究では、「哲学の欲求」に基づく包括的な「学」の成立構想がイエナ時代の最初期から見出されることに注目し、この観点から、④「主観的導入」が「学」を成立させる近代的教養の一つの形態だったこと、そして、①「論理学的導入」すら——時間的に見て——「学」の成立を前提していることを指摘した。このような解釈は、「論理学」偏重気味の従来のヘーゲル発展史研究に対して根本的な転換を迫るものとなる。

「哲学の欲求」論に基づく『差異論文』の新たな解釈——シェリングとの対決を軸に

『差異論文』（1801年）は、『フィヒテの哲学体系とシェリングの哲学体系との差異』という正式タイトルのとおり、二つの哲学の違いについて論じた著作である。その序論でヘーゲルは、フィヒテの哲学とシェリングの哲学を混同して両者を批判するラインホルトに対して、その間違いを正すために執筆したと記している。しかし、実際には、簡潔ながら多くの論点を含む『差異論文』の主眼は必ずしも明白ではなく、研究者の間でもさまざまな解釈が提示されてきた。とりわけ、初期イエナ時代を通じてシェリングに近かったヘーゲルが、シェリング哲学と同様の体系構想——超越論哲学と自然哲学の両立論に基づく総体的体系——を主張しながら、どの程度、後年のヘーゲル独自の哲学体系に通じる萌芽的思想を保持していたのか、といった点は論争点であ

り続けている (D. ヘンリッヒ、J. H. トレーデ、W. イェシュケ)。

そうした中、本研究は、『差異論文』第一章で提示される「哲学の欲求」のモチーフが、シェリングを継承する体系構想そのものの理論的前提となっていることを指摘し、その意義を究明した。すなわち、『差異論文』は、フィヒテ哲学とシェリング哲学の本質を「主観的-主観客観」と「客観的-主観客観」と解釈した上で、それらに基づいて、超越論哲学と自然哲学からなる哲学体系というシェリング的構想を提示するが、この構想は近代の教養段階における絶対的な哲学の要求によって初めて実現可能となる。それゆえ、この観点からすれば、ヘーゲルは、シェリングの構想よりも包括的・根源的な仕方

で体系哲学を基礎付け、さらに、シェリング自身の哲学さえその歴史的形態の一つ、つまり、「絶対者の現象」として位置付けうることになる。

このような解釈は、W. C. ツィンマーリが主張したように、「哲学の欲求」論が『差異論文』の理論展開にとって決定的な意義をもつことを証拠立てるだけでなく、それが当時のヘーゲル自身の思想的立ち位置に関わることを露わにした。また、ヘーゲルの思想形成との連関でいうと、かつては初期イェナ時代のシェリング的な「実体性の哲学」の立場から後期のカント・フィヒテ的な「主観性の哲学」の立場へと転身したとするヘンリッヒらの解釈が有力だったが、近年では、もともとヘーゲルは、初期イェナ時代からシェリングの立場とは異なってお

DESK教育プログラム・海外調査奨学助成金制度一覧

プログラム	ドイツ研究修了証 ZDS-BA (Zertifikat für Deutschlandstudien in B.A.)	欧州研究プログラム ESP (European Studies Program)	ドイツ・ヨーロッパ研究修了 証 ZDS-MA (Zertifikat für Deutschland- und Europastudien in M.A.)	博士論文奨学助成金 ZSP (Zentrumsstipendien für Promotionsarbeiten)
対象	学部後期課程	修士課程 (総合文化研究科の文系4専攻)	修士課程 (ESP登録生を除く)	博士課程
概要	ZDS-BAは、学部後期課程の学生のドイツに関する学修・研究を促進するためのDESK独自の教育プログラムです。ドイツに関する論文作成等に関係した現地調査旅費、留学、大学のセミナー参加のための旅費滞在費を補助しています。	大学院総合文化研究科の文系4専攻のいずれかに所属する修士課程の学生は、入学後の履修登録時にESPプログラムに登録できます。ESP登録学生は、修士論文執筆に関連する現地調査旅費、およびドイツの大学に留学するための旅費滞在費の助成を受けることができます。	ZDS-MAは、大学院修士課程の学生の学修・研究を促進するためのDESK独自の教育プログラムです。ZDS-MA登録学生は、ドイツやヨーロッパに関する学修・研究を計画する場合にセンターの奨学助成金に応募できます。ドイツやヨーロッパに関する研究のためのドイツでの現地調査旅費を補助しています。	ZSPは、博士論文の作成を支援するためのDESK独自の奨学助成金です。ドイツやヨーロッパに関する博士論文を作成し、その完成が近い者に対して、博士論文執筆のためのドイツでの研究滞在旅費を補助しています。

り、「主観性」を取り入れた「実体性の哲学」を構想していたと主張する重要な研究が現れてきている（C. ヴェックヴェルト、滝口清栄）。こうした研究が『自然法論文』（1802/03年）や『人倫の体系』（1803年）といった精神哲学系統の論文に示された社会哲学的モチーフの変遷に着目しているのに対し

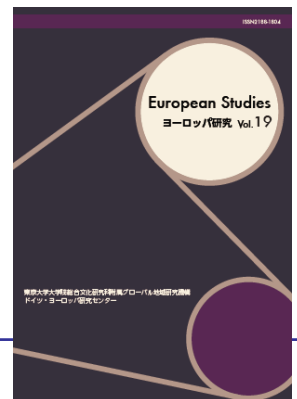
て、本研究は、同様のテーゼを「哲学の欲求」論の展開という体系的により基礎的なレベルで捉えている。それゆえ、この観点は、従来乏しかった包括的な視角を発展史研究に取り入れることを可能にすると思われる。

VII 関連出版物の紹介

『ヨーロッパ研究』第19号

ドイツ・ヨーロッパ研究センターでは、内外のドイツ・ヨーロッパ研究者の寄稿による最先端の研究の紹介の場として、また、ドイツ・ヨーロッパ研究を志す若手研究者の研究成果の発表の場として、『ヨーロッパ研究（European Studies）』（電子ジャーナル）を発行しています。DESKホームページよりダウンロードが可能です。

http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/j/books_bk_es_update.html



目次：

I 論文

ジェームズ6世と王の義務：絶対主義再考
（李東宣）

市民、市民層、市民性
（マンフレート・ヘットリング [川崎聡史訳・平松英人監訳]）

最新の情報・イベントについては、
ホームページもご覧下さい
<http://www.desk.c.u-tokyo.ac.jp/>

DESK事務室

〒153-0041
東京都目黒区駒場3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科・教養学部
9号館3階313号室
Tel/Fax : 03-5454-6112
E-mail: desk@desk.c.u-tokyo.ac.jp